

第IV部門 東福寺境内における自然の見え方に関する研究- 来訪者の視点から-

京都大学工学研究科	学生員	○八木 弘毅
京都大学工学研究科	正会員	出村 嘉史
京都大学工学研究科	正会員	川崎 雅史
京都大学工学研究科	正会員	樋口 忠彦

1. 目的

景観を構成する自然的要素には、前景的自然と背景的自然があると考えられる。本研究においては、東福寺への来訪者の景観体験に着目して背景的自然の見え方を明らかにすることを目的とする。

背景的自然の見え方とは、次の二つの観点がある。

1. 来訪者の景観体験における自然的要素の役割、位置づけという意味的観点。
2. 来訪者と視対象となる自然的要素の位置関係というフィジカルな観点。

2. 方針

背景的自然の見え方を明らかにするにあたって、来訪者の一連の景観体験を詳細に分析することが前提となる。

分析方法として、自らが被験者となり、10月半ばから1月中旬まで10回のフィールドワークを行った。東福寺境内の塔頭と開山堂常楽庵、参道を対象とした。来訪者にどのような景観要素が知覚されているか、また、敷地に入っていく景観体験を演出する要素について野帳によりその場所の情報として記述した。その際、背景的自然の見え方に着目し、その情報を野帳に記録していった。寺院敷地に向かっていく景観体験については、それをもとに空間構成の図面を作成し、併せて体験の内容を併記した。それらより、背景的自然の意味的な見え方について考察した。更に、各寺院において、どの視点場からどの自然的要素が見えるかについて、地図上にプロットすることにより、背景的自然のフィジカルな見え方について考察した。

3. 事例研究 芬陀院

ここでは、事例研究の一つ芬陀院を取り上げる。この芬陀院は、正式名称は芬陀利華院と言い、雪舟東楊禪師(1420-1506)が作庭したと伝えられる庭園にちなんで雪舟寺とも称される。伽藍に対して西側に占地され、芬陀院の敷地構成は、図1のようになっている。

以下、来訪者の景観体験における自然の見え方につい

て分析を行う。

表門の背後には竹林が背景として見えている。結界表現と背景的自然である竹林により、来訪者は、自然の中に入っていくかのような感覚を得る。

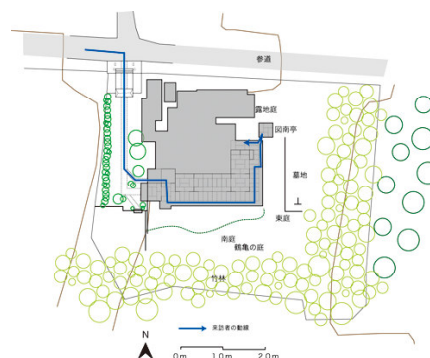


図1 芬陀院の敷地構成

表門をくぐり前庭にはいると、来訪者は、視界を植栽の緑がしめ、自然の中に放り出されたかのような印象を受ける。東側は建築、西側は背の高い植栽、南側である舗石道の先には竹林が背景として見える。奥行き28m、幅10m程の細長い囲まれた前であり、心地よい囲繞景観となっている。ここでも、背後の竹林が建築の結界表現が主となる景観の背景として来訪者に知覚される。

建築に入っていく奥へ進んでいくと、まず、雪舟作庭と伝えられる枯山水式庭園である鶴亀の庭が広がる。建築は、霊雲院と同様に庭園に対して開口部を多く取ることができる開放的な作りになっている。縁側において南庭が視界に入った時、来訪者の景観体験はクライマックスを迎える。シークエンス景観におけるスケール感と開放感の変化性と次に述べるような庭園の断面構成(図2)によるものである。

すなわち、縁側に腰を下ろすと視点場手前の白砂から苔、背の低い植栽、中ぐらいの植栽、一番奥の背の高い竹林と、徐々に高さが高くなっていく。平場の狭い庭園面積でかつ背の高い竹林に囲まれながらも圧迫感がなく、東側と西側の敷地周縁部の竹林へ無理なくつながっていく囲繞空間となっている。芬陀院では竹林の背の高さが

高く、竹林による垂直方向の線が目立ち、密度も濃いことにより迫力のある景観となっている。

東庭の形状は、前庭よりも狭く細長い。また、墓地との境界は高さ約 1.8mの植栽である。そのため、東庭と隣接している墓地は見え、東庭と、墓地の東側にある竹林のみが来訪者に知覚される。そのため、庭園全体が竹林で囲まれている印象を与え、囲繞性が保たれている。ここでは、囲繞性を創出する要素となる竹林は、南庭よりも視点場からの距離があり、来訪者には小さく見える。更に、東庭の面積の少なさ、庭園構成要素である植栽の大きさが小さくなっていることにより、来訪者は南庭で感じたスケール感が凝縮され小さくなったことを感じる。

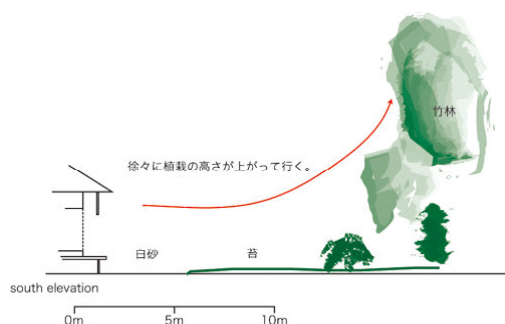


図2 芬陀院庭園の断面構成

4. 芬陀院における自然の見え方（意味的観点）

芬陀院における背景的自然の見え方をまとめると、以下のようになる。

- ・敷地を囲むようにして茂っている竹林が背景的自然となり、それらは、前庭、庭園において囲繞性を演出する要素となっていた。
- ・エントランス、前庭（分節前）において、舗石道により明確なオリエンテーションが与えられ、その先に背景となる竹林（自然的要素）を配置することによって、オリエンテーションの先に自然的要素があり、自然への志向的役割が見られた。
- ・南庭と東庭において、視距離の違いにより背景となる竹林の見え方が異なっていた。つまり、南庭では視距離が短く東庭では視距離が遠いことによって、スケール感が変化していた。

5. 芬陀院における自然の見え方（フィジカルな観点）

芬陀院周辺の寺院について、芬陀院から見た竹林が景観のなっているように囲む寺



構成要素に
いるか調査
ころ、図の
竹林を取り
院において、

多視点場的に共有されており、竹林が共有核となり景域を形成していることがわかった（図3）。

図3 竹林を核とする景域

6. 東福寺境内に見られた景域

このような事例研究を行うことにより図4のような自然を共有核とした景域が明らかになった。

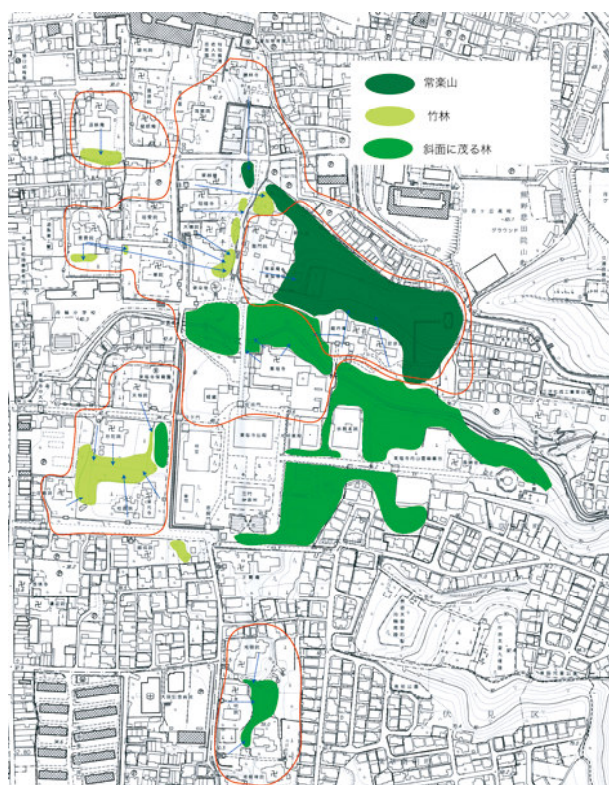


図4 東福寺境内に見られた景域

7. 結果

背景的自然は、来訪者の景観体験において、囲う役割、自然への志向的役割を持ち、重要な景観要素となっていた。またさらにそれらは、多視点場的に共有されていた。これにより、自然的要素を介在した寺院間のつながりを把握できた。